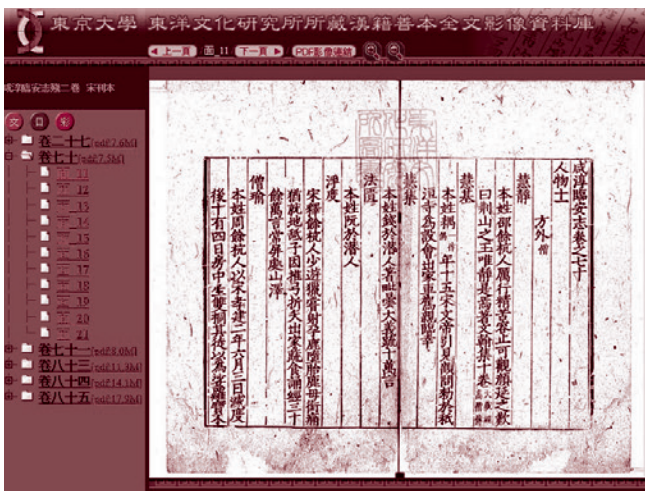


明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

中国学文献資料の現在



四庫系列叢書から見える知の景観
成田 健太郎

明清史研究のデータベース
村上 正和

韓国所蔵漢籍の検索およびデジタル画像閲覧の方法
木村 拓

漢籍デジタルアーカイブの横断検索を目指して..
図書館情報学の視点から
木村 麻衣子

はじめに

大木 康

どのような分野であれ、研究を進める上で重要なのが、関連する文献資料であることはいうまでもあるまい。実験を重視する理系の研究にあっても、その成果は論文の形で世に問われる。論文すなわち文献資料である。人文学の領域にあっては、またある意味では文献を読むことが研究そのものであり、必要な文献にアクセスできるかどうか、研究の死命を制することになる。

かつては、文献資料の多くは書物の形で存在し、図書館に行き行って書物を閲覧するというのが、大方のスタイルであった。とりわけ古典資料の場合、その現物を所蔵する図書館に出かけ、閲覧させてもらう必要があった。

しかしながら、近年そうしたスタイルは、相当様変わりしつつある。中国学の分野についていえば、一つには、中国、台湾から陸続と刊行される大型の影印叢書がある。影印叢書を購入することによって、書物の現物そのものでは

ないにしても、その書影を、所蔵館に行かなくても容易に見られるようになる。そしてさらにはインターネットの発達普及により、そもそも自宅にあって、多くの文献資料にアクセスできるようにもなっている。

こうした資料にアクセスできるかどうか、あるいはそもそもそうした資料の存在を知っているかどうかは、これからの研究にとって、きわめて重要なことであろう。

本特集では、漢籍の大型叢書について、大型のデータベースについて、おとなり韓国における漢籍データベースの状況、そして、各所で作られている漢籍デジタルアーカイブの横断検索をめぐる、新進気鋭の研究者のみなさまから原稿を頂戴した。中国学研究における資料状況の現在を知り、将来を考える材料としていただければ幸いである。

(東京大学東洋文化研究所教授)

四庫系列叢書から見える知の景観

成田 健太郎

「四庫系列叢書」という語を初めて聞く人もあるかもしれないが、それを説明する前に、まずその名称の基づくところの『四庫全書』に触れておかなければならない。

清の全盛期である乾隆帝の治世に編纂された一大叢書



写真1 『四庫全書珍本』初集

『四庫全書』については、すでに多くの研究と詳しい解説があり、最近では永田知之氏による「目録学の総決算：『四庫全書』をめぐる」(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター編『目録学に親しむ：漢籍を知る手引き』所収、研文出版、2017年)が、その編纂の経緯から内容、そして中国の目録学史における位置づけに至るまで詳細かつ簡明に論述していて、本稿において付け足すべきことは何もない。

もともと副本を含めて8セット作られた『四庫全書』は、清末の度重なる戦乱によって甚大な損失を蒙り、完全な形で残ったのは、北京の紫禁城にあった文淵閣本と、熱河の避暑山荘にあった文津閣本の2セットだけである。そして清朝が倒れると、『四庫全書』はもはや皇帝の私有物ではなくなり、そのテキストを大量に複製して学術に役立てようという企画が現れた。まず1934年から1935年にかけて、『四庫全書』に収録された書籍のなかでも稀少なもの230種を選定し、文淵閣本を用いて影印したのが『四庫全書珍



写真2 『景印文淵閣四庫全書』

本』初集である。戦後にはこれに続く二集から十二集ならびに別輯も続々と刊行されている。

そして1986年には、ついに文淵閣本の全部を影印した『景印文淵閣四庫全書』全1500冊が刊行された。現在普通に『四庫全書』として利用されているのはこの影印本であり、「四庫全書の検索」云々と話題になるのはこの影印本に基づく2000年に発売された電子版のことである。ところで、この『景印文淵閣四庫全書』の出版によって上記の『四庫全書珍本』が全く存在意義を失ったかといえそうともいえない。『景印文淵閣四庫全書』はモノクロ印刷であり、大部分の収録書はそれで用が足りるが、しかしたとえば南宋の方崧卿による『韓集举正』は、唐の韓愈の文集のテキストを校訂する著述で、墨で書かれた字と朱で書かれた字には重要な意味の違いがある。モノクロの『景印文淵閣四庫全書』ではそれが同じに見えてしまい、黒と朱で刷り分ける『四庫全書珍本』初集に及ばないのである。なおこの例は、吾妻重二氏による『続修四庫全書』と四庫関連叢書（関西大学図書館『関西大学図書館フォーラム』

第9号、2004年<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/10595>)の完全な受け売りである。

以上は『四庫全書』とそれを利用して作られた大型叢書であるが、このほかに『四庫全書』にインスパイアされる形で派生した大型叢書がいくつもある。復旦大学図書館による『四庫系列叢書目録・索引』は、これらの大型叢書に収録されている書籍を一覧・検索できる工具書であり、本稿ではこれにならって「四庫系列叢書」の呼称を用いている。上記の吾妻氏の論文のほかに、国立国会図書館による「『四庫全書』と関連叢書の調べ方」(https://navi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-asia-130.php)、宮澤知之氏による「四庫全書及び四庫全書の名を冠した大型叢書解説」(佛教大学図書館報『常照』第50号、2001年<http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/library/publish/files/josho050.pdf>)などが四庫系列叢書の解説として有用である。以下、『四庫全書』から派生した『続修四庫全書』、『四庫未収書輯刊』、『四庫全書存目叢書』および同『補編』、『四庫禁燬書叢刊』および同『補編』について見ていこう。

周知のとおり、日本政府が義和団事件賠償金の一部を用いて実施した「東方文化事業」によって、東方文化学院の東京・京都両研究所は1929年に設立され、それぞれ曲折を経て現在の東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所に行き着いているが、同事業ではこれに先んじて、北京に人文科学研究所を、上海に自然科学研究所を設立していた。中国人学者を主力とする北京人文研の研究活動は、日中関係の悪化にともなってしだいに困難に陥るが、そのなかで企画されていたのが『続修四庫全書』の編纂である。『続修四庫全書』は、その名のとおり『四庫全書』の続編であり、主に『四庫全書』が編纂された乾隆年間以降の著述を収めようと企図するものである。『続修四庫全書』の編纂は清末からしばしば提唱され、北京人文研では収録すべき書籍を選定して提要(書籍解題)作成を急いだが、

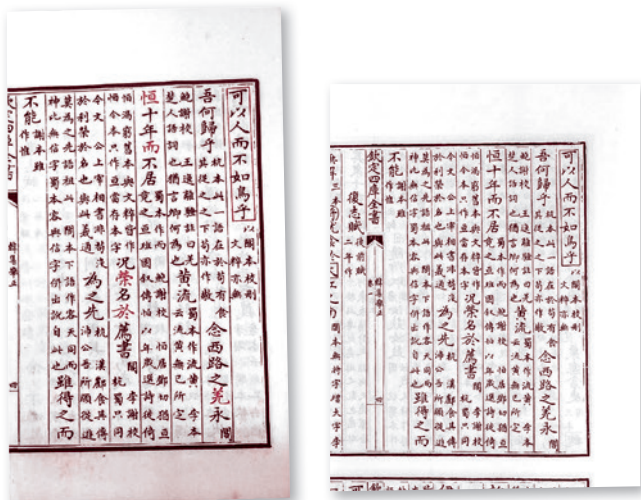


写真3
左：『四庫全書珍本』初集本『韓集举正』
右：『景印文淵閣四庫全書』本『韓集举正』



写真4 『続修四庫全書』



写真5 『四庫未收書輯刊』

1945年の日本の敗戦によって研究所は廃され、提要は完成を見ないまま北京に残された。この提要は、日本に保管された副本によって戦後台湾から出版されたことはあったが完全なものではなく、北京に残された稿本が1996年に『続修四庫全書総目提要（稿本）』として影印出版されたことによってやっと全貌を明らかにした。

『続修四庫全書』の編纂は、以上の経緯をふまえて1994年に再開され、各書籍の善本を選定して影印し、1800冊からなる叢書が2002年に完成した。収録された書籍は、上述のとおり乾隆以後の著述を主とするが、そればかりでなく後述する四庫未収書、四庫存目書、四庫禁燬書の重要なものも含まれ、また『四庫全書』の収録書であっても、改めてより優れたテキストを収録しているものがある。その分量はもちろん、学術に与えたインパクトも四庫系列叢書の中で最大といってよい。

清の阮元は、編纂者に認知されなかったために『四庫全書』に収録されなかった書籍の提要を『四庫未収書提要』にまとめ、上述の北京人文研でもこれを承けて『四庫未収書分類目録』を作成した。2000年に出版された『四庫未収書輯刊』300冊は、四庫未収書収集の完結を告げる成果であり、先行する『続修四庫全書』や『四庫全書存目叢書』と重複する書籍を省いて善本を影印している。

『四庫全書』編纂のために収集され、解題も作成されたが、相対的に重要でないと判断され、最終的に『四庫全書』への収録を見送られた書籍は少なくない。それらは「存目書」と呼ばれ、その提要のみ『四庫全書総目提要』（略して『四庫提要』）に収められている。1995-1997年の『四庫全書存目叢書』1500冊および2001年の『四庫全書存目叢書補編』100冊は、『四庫全書』成立後も散佚を免れた存目書を影印出版する。

2000年の『四庫禁燬書叢刊』311冊および2005年の『四庫禁燬書叢刊補編』100冊は、『四庫全書』編纂時に政治的理由から禁書に指定され、版木もろとも破却された書籍のうち、幸いにして現在までテキストの伝存したものを影

印出版する。そもそもどのような書籍が禁書指定を受けたかは『四庫提要』にも記されないため、主として姚観元『清代禁燬書目』、孫殿起『清代禁書知見録』、雷夢辰『清代各省禁書彙考』、陳乃乾『索引式的禁書総録』に基づいて収録すべき四庫禁燬書を選定し、できる限り状態の良いテキストを見つけ出している。善本とは言いがたい状態のテキストも少なくないが、禁書の網をかいぐって今日まで伝えられていることだけで奇跡といえる。また、禁燬には書籍の全部を破棄する全燬と、一部のみ削除ないし改変する抽燬とがあるが、抽燬書は存目書に入れられることもあり、上記の『存目叢書』に抽燬後のテキストが収録されているものがある。『禁燬書叢刊』は、このような書籍の抽燬前のテキストが見つければそれを影印収録する方針を採っており、そのことが学術にとって大きな意味を持つことは言うまでもない。

さて、東京大学新図書館計画の一環として開館準備中のアジア研究図書館には、東洋文化研究所図書室も参加して漢籍に特化した分館となる予定であるが、附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）が2014年の発足以来アジア研究図書館の蔵書構築のために購入してきた図書のうち漢籍は、アジア研究図書館の開館を待たず、すでに東洋文化研究所図書室に排架されて閲覧に供されている。そしてこのたびU-PARLでは、以上の四庫系列叢書のうち東洋文化研究所図書室に所蔵されていなかった『四庫禁燬書叢刊』および同『補編』を一括購入し、2017年9月現在整理中である。これも整理作業完了しだい東洋文化研究所図書室に排架されるので、ご期待いただきたい。

かくして東洋文化研究所図書室には、四庫系列叢書が勢揃いすることになるが、近年未曾有の活況を呈する中国の出版界に、今後さらに新しい四庫系列叢書が誕生して、収書担当者と排架担当者を悩ませる可能性はあるだろうか。

筆者の私見では、『存目叢書』や『禁燬書叢刊』に補わ

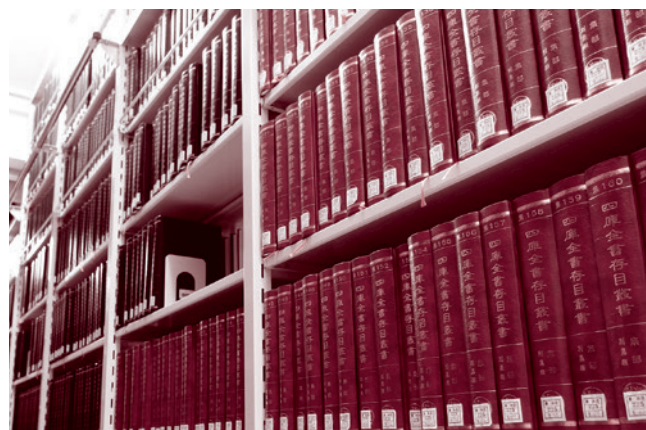


写真6 『四庫全書存目叢書』（以上の写真は東洋文化研究所図書室にて撮影）

れるべきテキストが発見されることはあるかもしれないが、シリーズを構成するほどの規模になるとは考えにくいと思う。いま一つは、『続修四庫全書』のような続編がさらに企画される可能性だが、未整理の書籍を発掘すればするほど、「四庫」という名に含意される、経史子集の四部全方位をまんべんなく収めるというコンセプトは維持しがたくなるだろう。

そもそも『四庫全書』は、当時の伝統的な学術観によって編纂されたため、史部では文書・記録の類を収めず、子部では道教、仏教等の宗教書を特に重要なものしか収めず、集部では戯曲・小説等の俗文学を収録していない。『続修四庫全書』は、『四庫全書』のこのような「偏り」をいくぶんか修正して、道教書、仏教書、戯曲、小説等の主要なものを収録しているが、文書・記録はなお収録対象外となっている。また『四庫全書』の収集範囲になかった清人の別集（個人別文集）を積極的に収めているが、そもそも母数が多すぎるため網羅性はない。

『四庫全書』に対する補完と続修というコンセプトに依拠し、伝存する書籍を網羅的に収集して、『四庫全書』の学術観によって組まれた四部分類に落とし込んでゆくと、伝存書籍の多い一部の分類がサイズ上異様に膨らんでしまい、『四庫全書』のコンセプトを壊してしまうことになりかねないのである。『続修四庫全書』はこの矛盾ざりざりのところで踏みとどまっており、四庫系列叢書に今後さらなる発展を望むことは難しいといえよう。

四庫全書的コンセプトによる大型叢書編纂が一段落した現在、未整理の書籍を収集し、体系立てて整理するというプロジェクトは、ジャンル別に網羅性を志向するフェーズに移行している。仏教書の「大蔵経」、道教書の「道蔵」はその先蹤といえ、さらに儒教書は、『四庫全書』の学術観においてきわめて重視されており、四庫系列叢書に積極的に収録されているが、これを超える網羅性を備えた「儒蔵」の編纂が現在計画されていることは耳目に新しい。

さきに触れた清人の別集については、1970年代から『清人別集叢刊』等のシリーズが出はじめ、戯曲については『俗文学叢刊』が、小説については『明清善本小説叢刊初編』等が出版されている。近年ではこれら集部の書籍の稀少なテキストがジャンル別・所蔵館別に陸続と整理・出版されており、こうした動きが落ち着くにはまだかなりの時間を要すると思われる。

檔案と総称される文書や記録、各地方行政単位ごとに編まれた方志（地方誌）は、中国近世・近代史研究に欠かせない史料となっている。各時代・地域の檔案がジャンル別・フォンド（資料群）別に数限りなく整理・出版されており、その数量の増加は今後いつ果てるとも知れない。方志は『四庫全書』に省単位以上のものが、『続修四庫全書』にも主

要なもの数十種が収録されているが、伝存する方志の数はこれに百倍するところではあるまい。

大量の書籍をデータベース化して提供する企画も、近年目覚ましい発展を見せている。U-PARLが2014年に購入し東京大学にて利用可能となったデータベース「中国基本古籍庫」は、四庫全書的コンセプトによるデータベースといえ、収録書籍数において『四庫全書』の約3倍の規模を誇る。同データベースを提供している北京愛如生数字化技術研究中心からは、このほかに「歴代別集庫」「中国俗文庫」「中国方志庫」等のデータベース製品も販売されている。基本書を「中国基本古籍庫」でカバーし、それ以外をジャンル別データベースとして提供する戦略は、四庫系列叢書の編纂が完結に向かうと同時に、ジャンル別大型叢書が発展してきた上述の経緯と相似形をなしている。

以上のように、中国学研究の材料となる無数の文献を収録する大型叢書・大型データベースは、四庫集約型からジャンル別網羅型に展開しつつあるが、しかし今後なお、学術的に質の高い重要な著述を収める四庫系列叢書のコンセプトと成果は、マクロとミクロを往き来して知の景観を獲得しようとするときに、なくてはならない道標として中国学研究を導いてくれるだろう。



写真7 整理中の『四庫禁燬書叢刊』

（附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）特任研究員）

明清史研究のデータベース

村上 正和

はじめに

現在の中国史研究においては、大型のものから個人利用を目的とするものまで、非常に多くのデータベース（以下、DB）が作られている。網羅的な史料検索と作業時間の大幅な短縮ができるという点からいえば、DBへのアクセス権の有無が研究環境の質を左右するとさえいよう。

他方で、無償のDBの中にも規模が大きく、有用なものが多い。しかしその情報が研究者のあいだで共有されているわけでは必ずしもない。研究者同士の何気ない雑談のなかで、はじめて存在を知ることあるのではないだろうか。有償・無償を問わずDBの情報を集めておくことは、研究を進めていく上で重要な意義があると思われる。

そこで以下では、筆者の専門とする明清史研究に関連するDBの簡単な紹介をおこなっていききたい。なお、本稿で紹介するDBの情報は、いずれも2017年8月末のものである。

愛如生の大型DB

明清史研究にかかわる大型DBとしてまず挙げなくてはならないのが、中国企業の愛如生が販売している『中国基本古籍庫』である。先秦から民国までの史料を1万種、字数にして17億字あまりを収録しており、全文検索や版本画像との対照もできる。明清史に限らず、中国史研究における最も一般的なDBであり、世界各地の大学・研究機関でも広く用いられている。

愛如生はこのほかにも1万種近くの地方志を収録した『中国方志庫』や、俗文学関連の史料をやはり1万種近く収録する『中国俗文庫』などの大型DBを販売している。日本では東方書店が代理店となっており、詳細はHP上で確認できる（<http://www.toho-shoten.co.jp/>）。

愛如生の大型DBを活用できれば、史料収集を網羅的に行えるだけでなく、人名や地名の確認などの作業時間が大幅に短縮できる。しかしネックになるのが価格で、『中国基本古籍庫』の場合は、同時に利用できる契約口数が1人の場合でもおよそ460万円が必要となる。

国内で『中国基本古籍庫』を導入している大学・研究機関もあるが、必ずしもウォークインユーザーにも無条件で

開放しているわけではない。また近年さまざまなDBが続々とリリースされているが、国内の研究機関で導入できるDBの数がかなり限られているのが現状である。一方で台湾の中央研究院では、非常に多くの愛如生DBが導入されており、『中国基本古籍庫』以外にも『中国方志庫』、『中国譜牒庫』、『古今圖書集成』、『四庫全書』、『全清經解』、『永樂大典』、『明代日用類書』、『敦煌文庫』、『歴代別集庫（明前編）』などが利用できる。このような研究環境の差が今後の研究の進展にどう影響するのか、関心の持たれるところである。

愛如生は、USBタイプの小型DBである『拇指数拠庫』（おやゆび君）も販売している。これは特定のジャンル別に史料を抽出したものであり、史部の場合なら『明代史料筆記』（20種286巻）、『清代史料筆記』（34種416巻）、『琉球史料』（8種34巻）、『日本史料』（15種79巻）、『朝鮮史料』（7種194巻）など135点がある。

なお愛如生によれば『中国基本古籍庫』の個人版も開発しているとのことであるが、今のところ日本での販売予定はない。

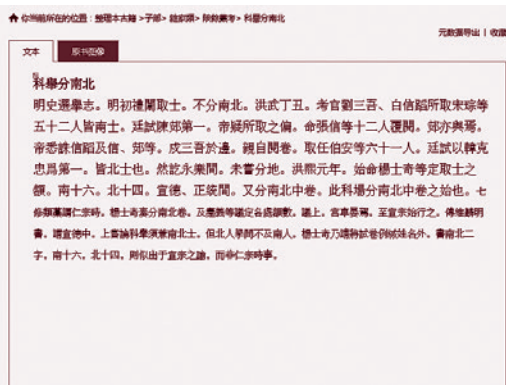
『中華經典古籍庫』

『中華經典古籍庫』とは中華書局が作成したDBで、『中国古典文学基本叢書』、『元明史料筆記叢刊』、『清代史料筆記叢刊』などおよそ1000点を収録し、全文検索もできる。愛如生と同じく東方書店が代理店となっており、契約口数が2人の場合はおよそ250万円がかかる。ウォークインユーザーの利用も認めている。



中華經典古籍庫の検索結果。「科学」で検索したところ4853件がヒットした。

¹ 清史研究のDB事情については、胡恒「数拠庫建設と清史研究」（『清史研究』2016年第4期）が詳述する。大澤隆「電子史料とデータベースについて」（中村元哉・大澤隆・久保享編『現代中国の起源を探る史料ハンドブック』東方書店、2016）は中国近現代史研究のDBを、川西裕也「歴史学とデジタル化 韓国の事例から」（九州史学会・史学会編『過去を伝える、今を遺す 歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものか』山川出版社、2015）は、韓国のDB事情を紹介する。



検索結果の一。趙翼『陔餘叢考』巻二九、「科学分南北」。



趙翼『陔餘叢考』（中華書局、1963年）の版面画像も確認できる。

無償公開されているDB

近年では、無償のDBの作成と公開も進んでいる。無償とはいえ膨大な史料を収録しており、利便性は極めて高い。以下では筆者が日常的に使っているものをいくつか紹介したい。

明清史研究のなかで無償DBの代表として挙げられるのが、『明実録』、『清実録』、『朝鮮王朝実録』である。中央研究院の歴史語言研究所が公開している「史語所學術創新數位深耕計畫」のHP (<http://dahcr.ihp.sinica.edu.tw/home.php>) からアクセスできる。

これらは決して小型ではなく、『明実録』全3058巻（現存するのは全3045巻）、『清実録』全4433巻（『満洲実録』『宣統政紀』含む）、『朝鮮王朝実録』全1706巻の全文検索ができる。現在の明清史研究では、編纂史料である実録よりも檔案（公文書）が基本史料になっているといえようが、膨大な量の実録が手軽に検索できる意義はやはり大きい。実録でしか確認できない文章もある。

「史語所學術創新數位深耕計畫」では実録以外にも、官僚を中心に明清期の人物を網羅する「人名權威資料查詢」や、地名検索のための「中国歴史地名查詢系統」、漢籍の全文検索ができる「新漢籍全文資料庫」などが公開されている。

「人名權威資料查詢」は生卒年、出身地、官僚としての経歴だけでなく、家族や子弟関係、著述リスト、さらには字や号といった異名も網羅されている。士大夫に関わる研究をする場合、異名が網羅されているこのDBは非常に有用である。明清期の士大夫は、一般的に複数の異名を持つ。例えば清中期の地方大官であった畢沅の場合、5つの字、5つの号を持つが、これでも少ない方である。異名のみから人物を特定するのは一苦勞で、清人の場合なら楊廷福・楊同甫編『清人室名別称字号索引（増補）』（上海古籍出版社、2001）などの工具書か、周駿富編『清代伝記叢刊索引』（明文書局、1986）を用いていたが、非常に時間がかかっていた。現在ではこれらの索引を用いる機会は大幅に減少したといえよう。

「中国歴史地名查詢系統」は、Google Mapと連動した地名検索ができる。地名の検索といえば譚其驤主編の『中国歴史地図集』（地図出版社、1982-87）が基本的な工具書であったが、索引の文字が非常に小さく、検索には不便であった。今後は、地名確認にはまず「中国歴史地名查詢系統」を用いるようになっていくと思われる。

「新漢籍全文資料庫」には有償版と無償版がある。無償版はかなり制限がかけられているが、それでも正史類は検索できる。地名や人物の簡単な履歴を調べるのに有用である。

なお台湾大学による「台湾大学數位人文研究中心」(<http://www.digital.ntu.edu.tw/#>) では、清代の官職と就任者を図示する「清季職官表查詢系統」、西暦・中暦を変換する「中

以上、代表的な大型DBとして『中国基本古籍庫』と『中華經典古籍庫』を紹介してきた。これら大型DBの利点は、やはり様々な史料の横断検索と、新しい史料の発掘ができる点にあるといえよう。限られた時間のなかで、経・史・子・集の各ジャンル全てに目を通すのはなかなか難しい。そうしたなかで、大型DBを用いて自分が全く想定していなかったタイプの史料を容易に調べられる点は、大きなメリットといえる。

しかし利用に際しては、大型DBならではの問題もある。史料の文脈を無視し、都合のよい部分だけを切り取ってしまう危険性もあるだろう。多量の史料を集めたはいいが、うまく整理できずに、不十分な解釈のまま研究に用いてしまいかもしれない。検索語を指定するので、自分が関心を持つ史料しか目を通さなくなり、結果的に視野が狭まるかもしれない。結局は利用する側の問題であるわけだが、大型DBを使えばそれで研究が進められるわけではないことを、自戒を込めて記しておきたい。

西暦転換対照查詢」、蘇州号碼をアラビア数字に変換する「蘇州碼轉換器」、度量衡の計算ができる「度量衡單位換算系統」が公開されている。研究者にとっての利便性という点では、これらのサイトも非常に重要なものである。

おわりに

本稿では明清史研究に関連する代表的なDBをいくつか紹介してきた。ここで取り上げたのはごく一部であり、今後も様々な規模のDBが作られていくであろう。研究の仕方もそれにとまって変化していき、かつては常識とされた工具書を手に取る機会はますます少なくなっていくと予想される。

DBの増加自体は非常に喜ばしいことで、研究環境は以前に比べて格段に向上した。しかし大型であればあるほど

高額となり、導入できる大学は限られてくる。もともと大学間には、蔵書量という研究・教育環境の差があったが、ILLを使えばそれはある程度は補い得た。一方DBの場合、検索結果を問い合わせることはできない。またウォークインユーザーの利用が認められるとは限らない。つまりは大型DBの導入が進めば進むほど、大学間の研究・教育環境の差が広がっていく可能性もある。

だからこそ個々の研究者にとっては、新しいDBや、国内外の大学・研究機関の導入状況と利用条件に関する情報を広く集めておくことが、これまで以上に重要になってくると思われる。近年になってDBの紹介記事も増えつつある。今後、DBの紹介や議論がより一層活発になることを期待したい。

(新潟大学大学院現代社会文化研究科准教授)

韓国所蔵漢籍の検索およびデジタル画像閲覧の方法

木村 拓

1. はじめに

韓国における歴史情報資源のデジタル化は、1999年以來、「知識情報資源管理事業」(現在の「国家DB事業」)の一環として進められてきた¹。その中心的内容は、歴史史料の原文・韓国語訳・デジタル画像のデータベース化であると言えるが、その成果の中で最も大規模なものとしては、国史編纂委員会の〈韓国史データベース〉²を挙げることができる。同サイトでは、朝鮮古代史から現代史に至るまでの基本史料や資料集などがデジタル化されている。本稿と関わりの深い前近代史についていえば、『三国史記』・『高麗史』・『朝鮮王朝実録』をはじめとする朝鮮史に関わる基本的な編年史料、さらには『明実録』・『清実録』までもがデジタルテキスト化されて公開されている(『朝鮮王朝実録』については英訳も進められている)。

〈韓国史データベース〉のほかに比較的大規模な史料データベースを挙げるとすれば、韓国古典翻訳院(元民族文化推進会)の〈韓国古典総合DB〉(文集資料のデジタルテキスト・韓国語訳・デジタル画像)、成均館大学校尊経閣の〈韓国経学資料システム〉(経学資料のデジタルテキスト)や〈韓国族譜資料システム〉(族譜のデジタル画像・人物データ)

などがある³。ただし〈韓国史データベース〉も含め、これらのデータベースは、あくまでも基本史料に関するもの、あるいはテーマ別に作成されたものであり、その意味で網羅的なものではない。これに対して本稿では、韓国における漢籍⁴の主要な所蔵機関の検索サイトを取り上げつつ、韓国所蔵漢籍の所在とデジタル画像をできる限り網羅的に検索する方法を述べてみようと思う。

2. 主要所蔵機関サイトにおける検索および画像閲覧方法

2-1. ソウル大学校奎章閣韓国学研究院(ソウル特別市)

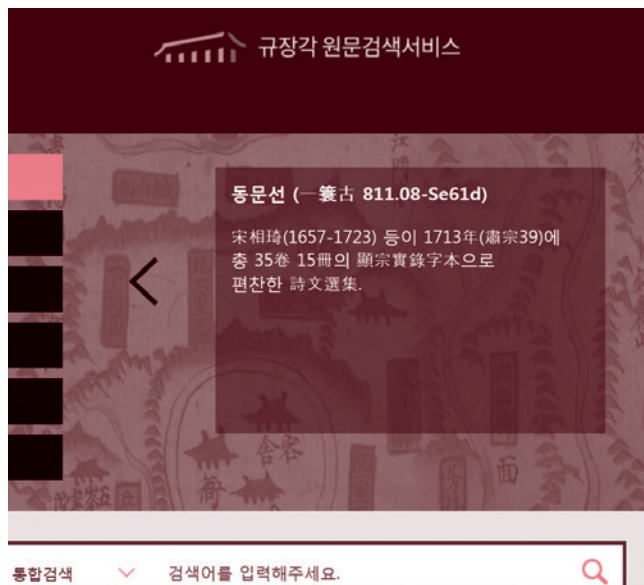
ソウル大学校奎章閣韓国学研究院(以下、奎章閣)は、日本の植民地期に創設された旧京城帝国大学付属図書館の「奎章閣図書」を引き継いでおり⁵、韓国ではもっとも多くの漢籍を所蔵する機関である。

〈ソウル大学校奎章閣韓国学研究院〉トップページの「資料検索」(자료검색)から「原文資料検索」(원문자료검색)を選択して検索を行うと、奎章閣に所蔵がある場合は「書名」(서명)欄に検出資料名が列挙される。その内、デジタル画像が公開されているものには「原文閲覧」(원문보기)の標示が付され、それをクリックすれば外部からでもデジ

タル画像を閲覧できるようになっている。ただし、同サイトからデジタル画像を閲覧しようとする場合、使用端末に所定のビューアをダウンロードしなければならないなど、一定の設定を施す必要があり、同サイトは必ずしも利用者にとって使い勝手がよいとは言えない。そうした状況に鑑みて、奎章閣では新たに〈奎章閣原文検索サービス〉を立ち上げている。

〈奎章閣韓国学研究院〉トップページの下方右側の「文化財庁事業学術DB」(문화재청사업학술DB)をクリックすると〈奎章閣原文検索サービス〉に移動することができる【図版①】。同サイトでは、奎章閣の蔵書を検索できる上、公開されているデジタル画像を外部からでも特殊な設定をせずに閲覧することができる。だが、現在の段階では、〈奎章閣韓国学研究院〉で公開されている画像がすべてアップされているわけではなく、すべての画像がアップされるには今後1～2年くらいを要する見込みであるという⁶。

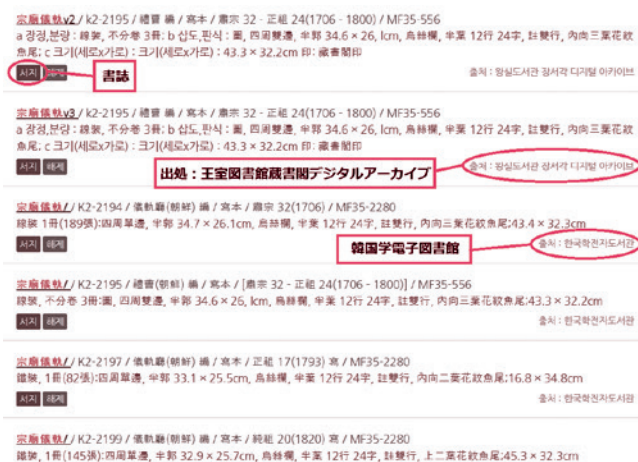
【図版①】〈奎章閣原文検索サービス〉の検索画面



2-2. 韓国学中央研究院 (京畿道城南市)

韓国学中央研究院（元韓国精神文化研究院）には、1981年、かつて日本の植民地期に李王職が管理していた「蔵書閣図書」が移管され、朝鮮王室関係の儀軌や謄録類を中核とする漢籍が多数所蔵されている。同研究院に所蔵されている漢籍については、〈蔵書閣〉で検索することができる。試みに〈蔵書閣〉トップページの検索窓に「宗廟儀軌」を入力して検索すると、35件が検出されるが、その内の11件については「出処」（출처）が「韓国学電子図書館」（한국학전자도서관）となっており、残りの24件は「王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ」（왕실도서관 장서각 디지털 아카이브）となっている【図版②】。

【図版②】〈蔵書閣〉における「宗廟儀軌」検索結果画面



「出処」が「韓国学電子図書館」となっている場合は、韓国学中央研究院の〈韓国学学術情報館韓国学電子図書館〉から検出されたものである。同サイトでは、韓国学中央研究院に所蔵される漢籍のデジタル画像を部分的に公開している。すなわち、〈蔵書閣〉を通じて検出された項目に付された緑色の「書誌」(서지)をクリックすると、画面が〈韓国学学術情報館韓国学電子図書館〉に移動するが、移動画面の中にPDF標示が付されている場合は、それをクリックするとデジタル画像を閲覧できるようになっている。ただしPDFを閲覧するには会員登録を行う必要がある(会員登録は国外からでもできる)。

一方、「出処」が「王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ」となっているものは、〈王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ〉から検出されたものであり、同サイトから検出される資料のほとんどはデジタル画像が公開されている。デジタル画像を閲覧したい資料の「出処」が「王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ」となっていれば、〈王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ〉に移動して改めて検索すればよい。なお、同サイトでデジタル画像を閲覧する際には会員登録の必要はない。

2-3. 国立中央図書館（ソウル特別市）

国立中央図書館は、旧朝鮮総督府図書館が所蔵していた漢籍を引き継いでおり、韓国内における主要な漢籍所蔵機関の一つとなっている。同館所蔵の漢籍を検索するには、〈国立中央図書館〉トップページの検索画面を利用すればよい。試みに「春秋胡氏伝」で検索してみれば、「単行資料」(단행자료)として20件が検出される【図版③】。その内、12件には「オンライン(原文)閲覧」(온라인(원문)보기)の標示が付されており、その標示をクリックすれば、特殊な設定や会員登録を行わなくても、外部から自由に閲覧することができる。

成均館大学校尊經閣〈韓国經学資料システム〉

<http://koco.skku.edu/>

成均館大学校尊經閣〈韓国族譜資料システム〉

<http://jokbo.skku.edu/>

国史編纂委員会〈韓国歴史情報統合システム〉

<http://www.koreanhistory.or.kr/>

ソウル大学校奎章閣韓国学研究院〈ソウル大学校奎章閣韓国学研究院〉

<http://kyujanggak.snu.ac.kr/home/main.do?siteCd=KYU>

ソウル大学校奎章閣韓国学研究院〈奎章閣原文検索サービス〉

<http://kyudb.snu.ac.kr/>

韓国学中央研究院〈蔵書閣〉<http://jsg.aks.ac.kr/>

韓国学中央研究院〈韓国学術情報館韓国電子図書館〉

<http://lib.aks.ac.kr/index.ax>

韓国学中央研究院〈王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ〉

<http://yoksa.aks.ac.kr/main.jsp>

国立中央図書館〈国立中央図書館〉

<http://www.nl.go.kr/nl/index.jsp>

国立中央図書館〈韓国古典籍総合目録システム〉

<https://www.nl.go.kr/korcis/>

ベースが構築されている。それらのデータベースは国史編纂委員会の〈韓国歴史情報統合システム〉によって連繫されている。この点の詳細は、川西裕也「歴史学とデジタル化—韓国の事例から—」（九州史学会・公益財団法人史学会編『過去を伝える、今を遺す—歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものか—』（山川出版社、2015年）52頁～57頁を参照されたい。

- 4 日本で漢籍というと、基本的な意味として「中国人が中国文で著述した書籍」といった意味を与えられる場合が多いが、韓国では作者の民族や記述言語などを問わず、大体1910年以前に作成された典籍を「古書」・「古典籍」などと称するのが一般的である。本稿でいう漢籍は、韓国における「古書」の中の漢文資料を指すこととする。
- 5 奎章閣の「奎章閣図書」の来歴については、森田芳夫「韓国における主要図書館および蔵書目録」（『朝鮮学報』116、1985年）参照。なお、後述の韓国学中央研究院の「蔵書閣図書」、および国立中央図書館の蔵書の来歴についても同論文を参照。
- 6 李民友氏（ソウル大学校奎章閣韓国学研究院学芸研究士）のご教示による。
- 7 コンゴンスリについては、阿部卓也ほか「アジア・環太平洋地域のナショナルデジタルアーカイブ政策—文化資源の統合と連携の諸相—」（『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』92、2017年）34頁～35頁を参照されたい。

（鹿児島国際大学国際文化学部准教授）

- 1 1999年以降の韓国における歴史分野の情報化事業については、류준범「역사자료 정보화의 현황과 전망（歴史資料の情報化の現況と展望）」（『史学研究』121、ソウル、2016年）85頁～90頁を参照。
- 2 〈 〉内の名称はサイト名を示す。以下同様。
- 3 この他にも、韓国では歴史分野に関わる様々なデータ

漢籍デジタルアーカイブの横断検索を目指して： 図書館情報学の視点から

木村 麻衣子

はじめに

東洋学研究情報センターが運営する「東京大学東洋文化研究所蔵漢籍善本全文影像資料庫」をはじめ、漢籍のデジタル画像を検索することのできるシステムは国内に数多く存在する。こうしたシステムを、本稿では「漢籍デジタルアーカイブ」と称し、①漢籍を1点以上収録していること、②書名や著者名といった書誌事項だけでなく、本文画像を閲覧可としていること、の2点を、漢籍デジタルアー

カイブの条件とする。リスト形式で検索機能のないもの¹⁾も、本稿では漢籍デジタルアーカイブと呼ぶ。

漢籍デジタルアーカイブの中には、「漢籍善本全文影像資料庫」のように漢籍のみを収録・公開する専用データベースもあれば、他の資料とあわせて収録・公開するものもある。例えば、大学の研究・教育成果を収集・保存して公開することを目的とした「機関リポジトリ」と呼ばれるシステムの中で漢籍画像を公開しているものがある²⁾³⁾。漢籍

デジタルアーカイブに収録される画像の質や、記録される書誌事項の詳細度は様々である。図書館だけでなく、博物館や文書館が構築する漢籍デジタルアーカイブもある。

所蔵機関に赴かなくとも資料の閲覧ができることは、漢籍デジタルアーカイブの大きな利点である。他方、どのデジタルアーカイブでどの漢籍が公開されているかを網羅的に把握することは難しく、たまたまGoogle検索でヒットしたり、公開されていることを知っていたりしなければ、利用しづらいのが現状である。すべての漢籍デジタルアーカイブを横断的に検索することができれば、この問題は解決する。筆者は、漢籍デジタルアーカイブを構築済の機関にできるだけ負担のない形で、かつ、利用者にとってより検索しやすく、閲覧しやすいシステムの構築を最終的な目標として、研究を進めている。

漢籍の横断検索の現状⁴⁾

複数機関が所蔵する漢籍のデジタル画像を横断検索することのできるシステムは、既にいくつか存在する。

国立国会図書館の「国立国会図書館サーチ」は、国立国会図書館の蔵書の書誌情報や連携先機関の書誌情報を一括検索することのできるシステムである。国立国会図書館や連携機関がデジタル化した資料については、書誌情報画面に表示されるリンクを辿って、本文画像を閲覧することができる。漢籍だけではなく、あらゆる種類の資料が検索の対象であるため、特定の書名で検索した場合、目的とする書物のデジタル画像だけでなく、関連する論文やウェブサイト、解説書の書誌情報などさまざまなものがヒットし、漢籍に絞って検索することはできない⁵⁾。連携機関によって提供する書誌情報の詳細度にばらつきがあるため、検索語によってはうまくヒットしない可能性もある。また、連携機関は現在のところ、都道府県立図書館など比較的大規模な機関に限られている⁶⁾。

TRC-ADEAC株式会社が制作・運営する「ADEAC」は、デジタルアーカイブの検索・閲覧を行うためのプラットフォームシステムである⁷⁾。各機関のデジタルアーカイブを同一プラットフォームで公開することによって、横断検索を可能にしている。参加機関によって公開している資料の種別は異なり、漢籍に限らない。記録される書誌事項は機関によって異なる。なお、本年3月より、国立国会図書館サーチの連携先にADEACが加わったため、ADEACが提供する書誌情報は国立国会図書館サーチからも検索することができる⁸⁾。

本年4月から試験公開されている「新日本古典籍総合データベース」では、国文学研究資料館による「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に参加する大学や協定締結機関が所蔵する古典籍の画像データを一括して検索できる。ただし、収録対象は「日本語の歴史

的典籍」⁹⁾であり、また、現在のところ検索できるのは大規模所蔵機関の資料に限られる。

京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターが運営する全国漢籍データベースは、漢籍のみを対象とした総合目録であり、2017年4月現在、延べ74機関が参加している¹⁰⁾。一部の資料には巻頭画像が掲載されているが、画像を提供しているのは3機関にとどまっている¹¹⁾。

以上のように、我が国には、まだ漢籍のみを対象とする、あるいは漢籍に絞って検索可能な漢籍画像の横断検索サービスは存在せず、特に中小規模の漢籍デジタルアーカイブは、横断検索の対象となりにくいことが懸念される。一方で、利用者の立場から見れば、たとえ1点でも漢籍のデジタル画像が公開されていれば、それが研究に役立つ可能性は大いにあるため、デジタル画像の公開点数にかかわらず、横断検索ができるに越したことはない。

中国目録学における「目録」と図書館の「目録」

横断検索をする場合、通常、書誌事項がある程度標準化されている必要がある。図書館の目録に記録される書誌事項は、国ごと、あるいは言語圏ごとに定められた目録規則によって、標準化されている。ところが、漢籍の場合、同一版本であっても1点1点が異なる情報を持っており、さらに中国目録学の伝統があるため、単純な標準化はできない。

中国目録学において、目録は「学術の源流を明らかにする」¹²⁾ ためのものであり、異本と見比べて校勘を行ったり、解題を書いたりすることも、目録の作成過程に含まれてきた。解題のない目録であっても、個々の書誌事項や、書物の並び順などに学術的な分析や判断が反映されており、目録は研究成果そのものであると言える。この立場に立てば、図書館目録が「検索の便を求め」だけの「ただのリスト」¹²⁾ に見えるのもやむを得ない。

他方、図書館は利用者がこの「リスト」によって、必要な資料を網羅的に（漏れなく）、かつ正確に（余計なものを除外して）検索できるよう心血を注いできた。例えば、漢籍では同一の書物がさまざまな書名をもち、あるいは、同一の著者が号や字を含め、さまざまな名を持つことが知られている。漢籍目録では、主に四部分類によってこの問題の解決を図っているが、四部分類は機関によって少しずつ異なり、機関横断的な検索には向かない。図書館目録では、典拠コントロールによってこの問題を解決している。具体的には、書誌の記録とは別に、書名や人名の記録（これを典拠と呼ぶ）を持っており、例えば利用者がある人名で検索した際に、その人名には別名もあることを知らせたり、あるいはその別名のもとに記録された書誌を併せて表示したりする。同姓同名の著者がある場合は出生年などで区別

し、ある人物で検索しているときに、別の人物が検索結果に紛れ込まないようにする（図1）。残念ながら、現在、我が国では典拠コントロールを行っていない図書館も多いが、横断検索においてより正確で網羅的な結果を表示するために、こうした図書館目録の技術を活かせるのではないかと考えている。

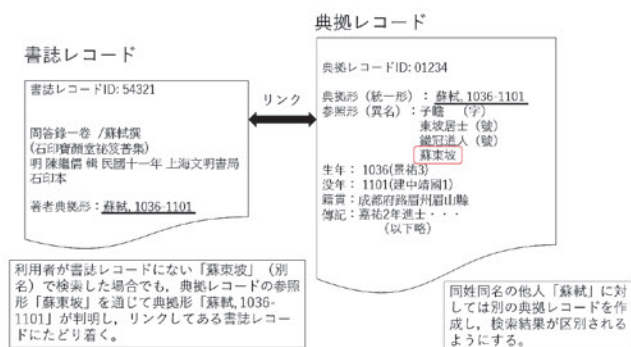


図1 典拠コントロールのしくみ

新時代の図書館目録における漢籍

近年、図書館目録に記述すべき書誌事項を、図書館の長年の慣習によって決めるのではなく、利用者が目録を通じて行いたいこと（利用者タスクと呼ばれる）を分析し、それぞれの利用者タスクに応じて必要とされる書誌事項を定めることの重要性が提唱された¹³⁾。現在、この考え方に沿って英語圏を中心に図書館目録規則の再策定が行われており、日本の図書館の多くが準拠している『日本目録規則』も、この流れを受けて改訂中である。和古書や漢籍といった資料については、日本あるいは漢字文化圏が独自に目録規則を定める必要があるが、これまでの図書館目録で定められていた漢籍の書誌事項について、利用者タスクの分析は進んでいない。この課題についても、今後取り組む予定である。

上述したように、専門家が作成する漢籍目録と、図書館の目録とはその性質が異なるため、情報の粒度あるいは精度が異なるのは致し方ない。粒度や精度がばらついた書誌を無理やり低いレベルで標準化するのではなく、専門家による研究成果としての漢籍目録の情報、あるいはその体系化された知識を活かしつつ、既に各機関が構築している漢籍デジタルアーカイブの書誌情報を統合するためにはどのようにすればよいか。まだ検討が不十分であるが、書誌情報をRDF（Resource Description Framework）等の形式としてLinked Dataとする方法や、解題部分をTEI（Text Encoding Initiative）ガイドラインに基づきマークアップするなどの方策が有効ではないかと考えている。

おわりに

筆者が専門とする図書館情報学は、人と情報をつなぐこ

とに関するあらゆる事柄を研究対象とし、すべての人が、必要な情報を漏れなく正確に検索でき、入手できることに価値を置いている。せっかく公開されている漢籍画像を、ゆくゆくは漢字文化圏のその他の地域で公開されている画像も含め、漏れなく正確に検索できるようにし、以って漢籍を研究対象とするすべての利用者の研究に資することができればと考えている。解決すべき課題は多く、現在進めている研究は長い道のりの第一歩に過ぎないが、今後も着実に歩んでいきたい。

- 1) 例えば、福井市立図書館の「越國文庫コレクション」（<http://lib.city.fukui.fukui.jp/archives/ka.htm>）など。
- 2) 例えば、東京外国語大学学術成果コレクション（<http://repository.tufs.ac.jp/doc/>）では、大学図書館報や、「インド・パキスタン宗教関係文献」等に加え、漢籍を含む古典籍の画像が公開されている。
- 3) 九州大学附属図書館「九大コレクション」（<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja>）は、学内成果物や学位論文に加え、契約中の電子ジャーナル等の電子資源も同一システム上で提供しており、漢籍デジタル画像も含まれている。
- 4) 横断検索とは、複数のデータベースに対して同時に同一の検索を実行することを言うため、「新日本古典籍総合データベース」や「全国漢籍データベース」は横断検索サービスではないが、本稿では複数の所蔵機関が持つ資料の画像を同時に検索できることを、わかりやすく「横断検索」と称している。
- 5) 国立国会図書館サーチ（<http://iss.ndl.go.jp/>）の詳細検索においては、「本」「デジタル資料」などの資料種別を選択して検索することは可能である。ただし、筆者の経験では、提供元の書誌にばらつきがあるためか、資料種別を選択すると結果に表示されるべきものが表示されない、あるいは表示されるべきでないものが含まれる、といったことがある。
- 6) 国立国会図書館。「国立国会図書館サーチについて」。<http://iss.ndl.go.jp/information/outline/>、（参照 2017-08-07）。
- 7) “ADEAC：デジタルアーカイブシステム”。<https://trc-adeac.trc.co.jp/>、（参照 2017-08-07）。
- 8) 国立国会図書館。「デジタルアーカイブシステム ADEACとの連携を開始しました」。http://iss.ndl.go.jp/information/2017/03/29_announce_1/、2017-03-29、（参照 2017-08-07）。
- 9) 国文学研究資料館。「プロジェクトの概要：新日本古典籍総合データベース（試験公開）」。<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/about.html>、2017-04-27、（参照 2017-08-07）。

- 10) “全国漢籍データベース協議会”. <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/>, 2017-07、(参照 2017-08-07).
- 11) 全国漢籍データベース作成委員会. “年次報告書：平成 27 年度”. <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/AnnualReport2016.htm>, 2016-04-08、(参照 2017-08-07).
- 12) 余嘉錫著；古勝隆一〔ほか〕訳注. 目録学発微. 平凡社、2013、p.33.
- 13) 国際図書館連盟 (IFLA) によって 1997 に承認された報告書 FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records、日本では『書誌レコードの機能要件』と訳される) がこの考え方に立っている。

(日本学術振興会特別研究員 RPD)

センター便り

・平成 29 年度漢籍整理長期研修

昭和 55 年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今年で 38 回目となりました。前期平成 29 年 6 月 5 日から 9 日まで、後期は平成 29 年 9 月 4 日から 8 日までの計 2 週間実施しました。海外からの参加者 1 名を含む大学図書館等の職員 11 名が参加しました。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を大いに発揮し活用されることと思います。講師として、大木康センター教授、さらに所外 11 名の専門家にご協力いただきました。この場をかりて厚くお礼申し上げます。今後も毎年実施していく計画です。



東洋学研究情報センター運営委員会委員 (2017年度)

所外委員

横手 裕	大学院人文社会系研究科・文学部教授
岩月 純一	大学院総合文化研究科・教養学部准教授
丸川 知雄	社会科学研究所教授
山口 英男	史料編纂所教授
加納 啓良	東京大学名誉教授

所内委員

榊屋 友子	教授	西アジア研究部門 (兼)センター造形資料学
平勢 隆郎	教授	センター造形資料学 (兼)東アジア第一研究部門
長澤 榮治	教授	西アジア研究部門 (兼)センター比較文献資料学

(オブザーバー)

板倉 聖哲	教授	(兼)東アジア第二研究部門 (兼)センター造形資料学
大木 康	教授	東アジア第二研究部門 (兼)センター比較文献資料学
小寺 敦	准教授	東アジア第一研究部門 (兼)センター比較文献資料学
園田 茂人	教授	新世代アジア研究部門 (兼)センターアジア社会・情報
松田 康博	教授	汎アジア研究部門 (兼)センターアジア社会・情報

センタースタッフ

榊屋 友子	(ますや ともこ)	センター長
センター造形資料学分野教授	イスラーム美術史	
平勢 隆郎	(ひらせ たかお)	副センター長
センター造形資料学分野教授	中国史	
板倉 聖哲	(いたくら まさあき)	
センター造形資料学分野教授	東アジア絵画史	
大木 康	(おおき やすし)	
センター比較文献資料学分野教授	中国文学	
長澤 榮治	(ながさわ えいじ)	
センター比較文献資料学分野教授	中東地域研究	
小寺 敦	(こてら あつし)	
センター比較文献資料学分野准教授	中国古代史	
園田 茂人	(そのだ しげと)	
センターアジア社会・情報分野教授	比較社会学	
松田 康博	(まつだ やすひろ)	
センターアジア社会・情報分野教授	アジア政治外交史	

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第 38 号

発行日 2017 年 10 月 31 日

編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号

電話 03-5841-5839 (直通)

FAX 03-5841-5898

E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp

URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>

デザイン コスギ・ヤエ / 印刷 (株)ヒライ